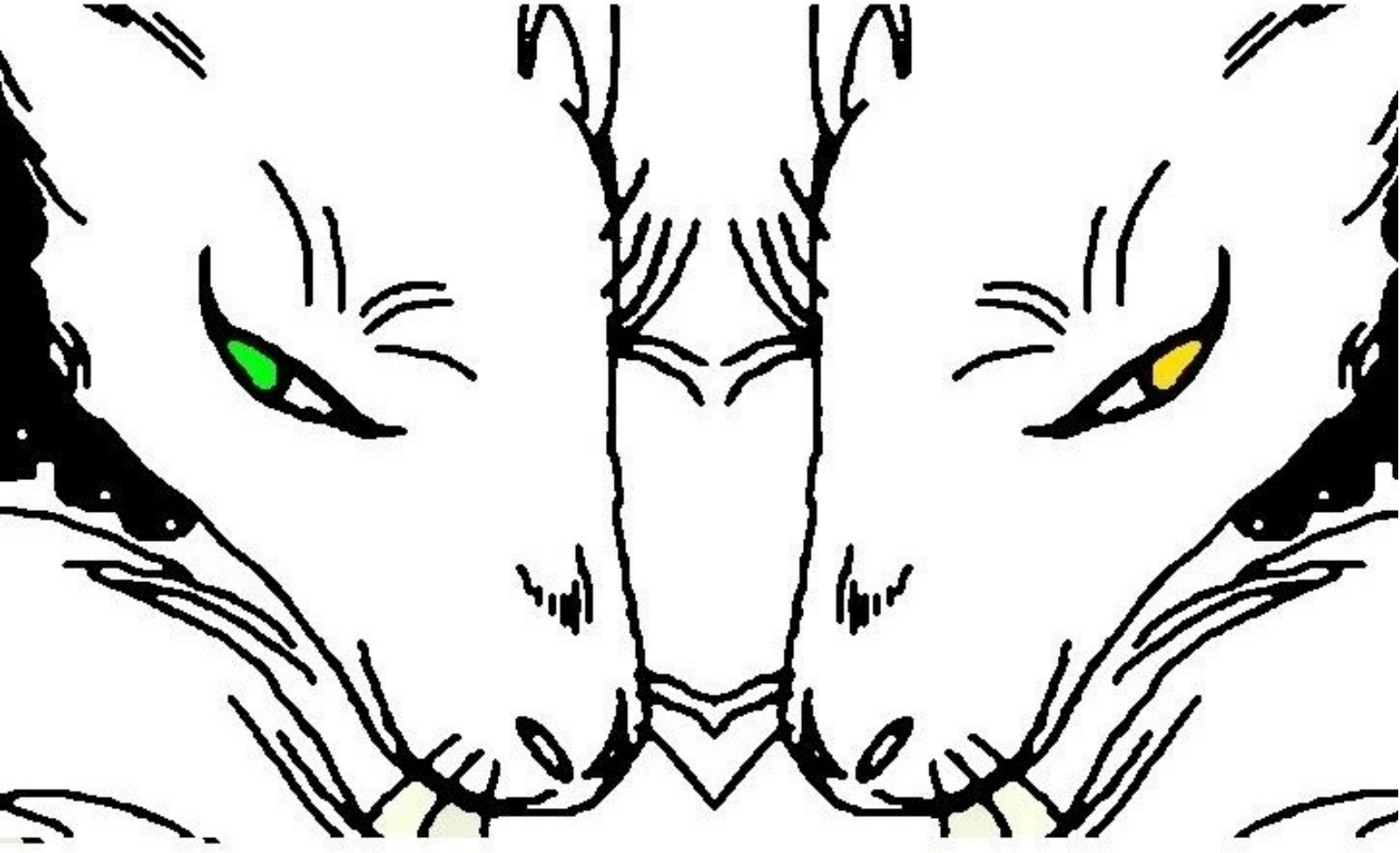
妖狐

みなみ



100年前この寺には
小さい2匹の白い妖狐が住んでいた
住職は黄色い目の妖狐に琥珀
緑の目の妖狐に翡翠　と名を付け可愛がっていた

妖狐は成長し夜な夜な村を暴れまわるようになった
村人はおびえ妖狐を封印するように
住職に持ちかけてくるようになった
住職は気が進まなかったが
2匹の妖狐の首に封印の念珠をかけた

琥珀は空に浮かびしばらく寺を眺めていたが
しばらくするとどこに消えって行ってしまった
翡翠は寺に残りその後は静かに住職と暮らしていた

それから数十年がたち住職は
「翡翠　私はひとつだけ後悔していることがある
それは琥珀を失くしてしまったことだ
これからはおまえのスキに生きるが良い」
そう言い残してこの世を去った
翡翠はそれからもこの寺に残り寺を守りつづけた

琥珀が森の中で眠っていると
小汚い住職がゆっくりと近づいて来たので
「おまえ私が見えるのか？」
と尋ねてみた

「あいにく私は目が悪くてね
おまえのことを見ることが出来ないんだよ
だがおまえが怪我をしていることは分かる
私の寺はあばら寺だがこんなとことにいるより
何十倍も良かろう　ついてくるが良い」

「私は人間の世話になるのはごめんだ」
「そう言わずついてくるが良い
おまえを悪いようにはしないから」
「断る」
「ではここに怪我の治療に通ってくるのは
構わないかね？
私は怪我をしてるおまえをほっておけない
おせっかいな性分でね」

それから毎日小汚い住職は
琥珀のところに怪我の治療をしきていた
おかげで怪我はすっかり完治した
それからは小汚い住職とあばら寺で暮した

それから数十年がたち小汚い住職は
「琥珀　私には兄弟がいる　ここから少し行ったところに
龍遠寺という名の寺がある　そこに行くが良い
そこならおまえを快く受け入れてくれるはずだ」
そう言い残してこの世を去った

龍遠寺は琥珀がいた寺である
帰りずらい琥珀はしばらくあばら寺に住んでいた
何年かしてあばら寺は取り壊され
行くところのなくなった琥珀は
龍遠寺に帰ることを決意したのだった

龍遠寺につくと琥珀は門の前でうろうろして
寺の中に入ろうとはしなかった
本当に快く受け入れてもらえるのか
不安だったからである
しばらくすると
「翡翠　留守を頼んだよ」
という住職の声が聞こえてきた

「おや？誰だい？
翡翠に似ているが目の色が違うようだが
そうか　おまえは琥珀だね」
住職は毛を撫でながら話しかけた

「琥珀　私は用事で出かけなければならない
翡翠と一緒に留守を頼まれてくれないか？
無理にとは言わない　おまえが良ければだがね」
そう言って住職は出かけて行った

夕方寺に帰ってきた住職は
琥珀の姿を見るとほほ笑みながら
「琥珀　行くところがないならここで暮すと良い
無理にとは言わない　おまえが嫌じゃなかったらだがね」
と言って琥珀の毛を撫でた

それから数十年がたち住職は
「私の死後100年間この寺を守っていてはくれないだろうか？
私は死後の世界で修業を積んで必ずこの世に帰ってくる
その時はおまえ達の念珠をた易く
はずせる位の力を持っているはずだ　頼んだぞ　翡翠　琥珀」
そう言い残してこの世を去った

それからは寺の屋根の上で寄り添い
住職との約束どおり寺を守っていたのだが
誰一人として翡翠と琥珀の姿を見ることが
出来なかった

月日は流れ100年の約束の時がきた
寺の中から住職が出てきて屋根にいる翡翠と琥珀に声をかけた
「おりてくると良い約束どおり封印をといてやろう 」

住職は経を唱えると翡翠と琥珀の封印がとかれた
「封印はとかれた　もうおまえ達を束縛するものも命令する人もない
おまえ達は自由なんだ」
と住職は叫んだが
翡翠と琥珀はその場を離れようとしなかった

「どうした？　もうこの寺にを守ることもないんだぞ
自由になったんたんだぞ
どこかに行きたいと思わないのか？」
と住職はたずねたが
翡翠と琥珀はその場を離れようとしなかった

「私を哀れに思ってくれてるのかい？
私には妻も子もない
この寺も私が死んでしまえば申し訳ないことであるが
廃寺になってしまう 情けないことだ」
と言うと住職はため息をついた

それから数十年がたち住職は翡翠と琥珀の体を抱きしめて
「翡翠　琥珀　ありがとう」
そう言い残してこの世を去った
翡翠と琥珀は住職の墓の上に寄り添っていた

そしてしばらくして眠るようにこの世を去った
黄金の光の粒が天に昇って行き
翡翠と琥珀は消えて行った

妖狐

http://p.booklog.jp/book/47479

著者：みなみ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/minamimoriyama/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/47479

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/47479

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.